

原三溪・野村洋三 横浜スタディツアー文化講演会要録（文責 事務局）

講師 熊倉 功夫先生 前静岡文化芸術大学学長 演題 『三溪翁の茶と人』

1. 中世文化の基調は、王朝だけではない。民衆が文化の形成者でもあった。

王朝や、室町時代の足利家の北山など権力者の視点から文化史を考えるに留まらず、「地方から」・「女性から」・「部落から」という弱者の視点が必要と自覚して、又時代の要請（安保・学生運動華やかりしころ）、時流もあり、東京教育大学1年の時に 部落問題研究会を作って、民衆の視点で「茶の湯」を研究しようとした。

当時の東京教育大学の歴史の看板教授 西山松之助、芳賀幸四郎の指導を受け、趣味と学問が一致するという有り難い研究活動に取り組み始めた。お茶も叔母から習い、女性の中でチャホヤされながら学んだものであった。



（三溪園正門から）



（鶴翔閣入り口）

2. 茶の歴史は利休のみにあらず、仏教渡来以前の日本独自の文化や思想に根付いたものでもある。

茶人の歴史は、足利時代から600年、利休から450年という歴史があるが、武家社会から始まり、仏教特に禅の影響が強いといわれているが、根っこはさらに深い。茶室の薄暗い中で落ち着く等、日本人の文化の根っこにふれている。それは、仏教渡来6世紀以前の古事記の世界観ともいべきものが、茶の湯の中に生きている。神社における「清め」あるいはお葬式の後に塩をまくという感覚は現在、薄らいでいるが、穢れやこの世とあの世の世界という日本人にDNAとしてすり込まれているものであり、この世へもがいて出てくる、小さい入り口、躡り口や結界という茶道と繋がっていくという歴史的深さがある。

3. 三溪は美食家であった。今や、和食(お汁)は絶滅危惧種。「和食の日」をこの11/24に制定。

原三溪は美食家として有名で、この鶴翔閣に和・洋・中の料理人が常駐していたほどであるが、岐阜の鮎が大好きで、特に長良川のものが好きであった。前田青邨の中津川の鰻と食べ比べをして青邨を叱った話は有名である。

世界ユネスコ遺産に和食を登録するため会長として取り組んだが、今や和食文化国民会議の会長として、「和食の日」を制定することができた。新嘗祭の日に制定したかったが、国民の祝日と重なるので11/24と決まったばかりである。

しかしながら、5人に一人が和食を一ヶ月食べたことがないという現状は、「和食」という日本文化にとって危機的状況と言って良い。特に天然だしのお汁・味噌汁は、今や絶滅危惧種となっている。この和食の日を制定に機に、お母さん、お父さんを再教育しなければならないと思っている。実は岐阜県は低い！のです。

4. 博士論文は、近代茶道史に取り組み、茶道史の中で欠落していた「近代」に光を当てた。

茶道は、合理的な動きであり、美しい振る舞いである。躰は国字（大和言葉）、体の振る舞いが美しいことからきている。茶の湯に出てくる行儀作法はその現れと言って良い。かつて「文化としてのマナー」という本を出版したくらいである。

一方で茶道史においては、かつては茶の湯の歴史に近代がないと言われた。利休、織部、遠州、・・・そして明治に入って岡倉天心くらいであった。

明治維新となり、大名や大商人などのスポンサーがいなくなり、家元は不遇の時代。宮尾登美子の小説「松風の家」は裏千家（後の万家）を取り上げているほどである。

明治20年になり、文明開化の反動でナショナリズムが戻ってくるが、家元でなく、財界、政界など富裕な人々が新しい担い手となって活躍した。有名などころでは、井上薫邸（現在の国際文化会館あたり）に明治天皇がお越し頂いた茶会がある。川上宗純宗匠が点前をして、目を上げず茶を入れた話は有名で、その折の余興に行われた天覧歌舞伎も逸話となっている。

その井上薫から原三溪が孔雀明王の絵を当時としては破格な値段1万円で買うという事件が起こり、三溪も茶道界にデビューすることになった。

5. 近代茶を興した三大茶人 益田鈍翁の茶会（他の2人は原三溪と松永耳庵で電力の鬼・中電創設者）

仏教美術に詳しい益田孝（鈍翁・三井の大番頭）は明治28年に弘法大師の書を手に入れた。初めての大師会という茶会が、明治29年（1896）3月21日（大師の縁日）に催された。弘法大師筆『崔子玉座右銘』を入手した鈍翁が、披露のために開いた茶会で、会の名称もそこに由来するものである。

「弘法大師空海真筆」の『崔子玉座右銘断簡』（さいしぎょくごゆうのめいだんかん）。

弘法大師空海が、中国の「さいえん」の「座右の銘」を、書いたものである。このことは、長く知られていなかった。だれもが、「人の短所を言うなかれ、自分の長所を説くなかれ」を「弘法大師空海さまの座右の銘」であると信じていた。しかし、江戸時代末期に刊行された『集古法帖』『本朝能書伝』などにより、もと三十八行七十六文字の一卷の書物であったことが判明する。この一幅「人の短所を言うなかれ、自分の長所を説くなかれ」は、その巻頭部分である。



（鶴翔閣 中庭から）



（野村弘光氏挨拶・サムライ商会ジオラマ持参）

6. 三溪の人となり

現在私は、美術館であるMIHO MUSEUMの館長であり、信楽の山の中にあります。その宝物は仏画「閻魔天」で原三溪翁が大事にした閻魔天である。これは室生寺にあった物を三溪が買い取ったもの。しかし購入当時に高僧がそれを買われたことを聞いて裁判所に差しおさえさせた。しかし原三溪に会ったら、その人柄に打たれて安心して取り下げたということである。

作家白崎秀夫が「北大路魯山人」「益田鈍翁」「松永耳庵」「原三溪」を書いた。

北大路魯山人は、素晴らしい天才であるが「人を裏切る」。書は人なりは嘘であるといえる？。

益田鈍翁は、切れ者故に、雅号に「鈍」をつけたくらい。

原三溪は「高潔すぎて面白く書けない」と言われる。親しく仕えた執事が、一度だけ叱られたというが、借金を返さない人に訴状を出したことに對してであった。それくらい、争うことが大嫌い、争うくらいなら譲ろうという精神であったという。

原三溪と益田鈍翁との違いは、三溪は、気車に乗るのに、間に合わないならお茶を飲んで次の気車を待とう。益田鈍翁は、間に合うように走るか、次の汽車を待てず車を走らせて行くタイプであったと言われる。

幼少の頃から、豊かな家庭で育ち、漢学や茶道も学び、人となり勉強。お茶をやっている人は物の渡し方や物腰が違うと言われるが、それは上京後勤めた跡見学園の学園長 跡見花蹊が認め惚れ込み、原家養子縁組の時には、わざわざ岐阜に出向き仲介の労を執ったほどである。

荒井寛方を始め、画家を支援したのは有名であるが、横山大観・速見御舟・下村観山・前田青邨・小林古径・今村紫紅と枚挙にいとまがない。絵の具が高い、集中しないと何もできないということで、三溪園内に画業に専念させる部屋を設け、所蔵品のいいものを見せて、若き画家たちと勉強会をやり議論風発、三溪園サロンと言われた。月額 100 円、今の 100 万くらいを一人一人に支援したと言われる。



7. 三溪の茶

(熊倉先生講演模様)

大正 3 年に三溪園での茶会を記者も経験して文章がうまい高橋掃庵が書いている。

イチョウの落葉の中に佇む、黄色いイチョウと清き目の原三溪。高士という人はこういう人、塵芥（人界）を超えた所にあつたと表現している。

三溪園サロンの当時、若き哲学者谷川哲三も書いている。特に長男を亡くしたときの 浄土飯（別名 蓮華飯）の茶会 は有名なところ。

昭和 12 年 8 月 7 日に後事をすべて託すべく育て上げた長男 善一郎（早稲田とハーバード大学出身で 46 才、妻は、三井の総帥 團琢磨の四女寿恵子）を失う。この時三溪 69 歳。8 月、恒例となっていた朝茶の開催直前、長男の善一郎が 45 歳の若さで急死したのである。誰もが茶会は中止になるであろうと思っていたが、初七日を過ぎた 15 日より、数回にわたり浄土飯の茶会を催した。軸には「君を望む」と書かれた惜別の一偈。

軸「君を望む」南宋の名僧断谿妙用の墨跡

「一夏同看竺嶺雲 眼中各自有瞳人 明朝雲向他山看 応椅欄干悵望君」

一夏同じく見る竺嶺の雲、眼中各自瞳人あり。明朝の雲、他山に向かって見る。まさに欄干によって君を悵望すべし。

懐石の趣にも席主の思いが込められた。蓮の葉を敷いた飯櫃にご飯を盛り、そのご飯を大輪の花を思わせるように紅蓮の花弁で覆って出された。取り分けたご飯には、若い蓮の実を煮たものを散らし、だし汁をかけて食す。

お菜は納豆(大徳寺納豆か)、漬物だけのシンプルなもの。菓子は「さつまいも茶巾しぼり 蜂蜜」。質素な取り合わせとは言え、蓮の花やその香気、熟しきっていない素材を使うところに、若くして亡くなった息子への思いが窺えます、と虎屋HPにある。

三溪園100周年 原三溪の描いた風景(神奈川新聞社出版)の年表には、「長男 善一郎を追悼するため、月華殿・金毛窟にて朝五時より浄土飯の茶事を催す・・・」とある。客は、8月15日小林古径、前田青邨ら、16日高橋箒庵、田中親美ら、18日益田鈍翁、松永耳庵ら、19日和田哲郎、谷川徹三ら、22日近藤外巻、近藤夫人ら、そして9月1日横井夜雨ら、茶事は6回続いた。

その茶会記を高橋箒庵は「昭和茶道記」で「蓮華飯供養会」、松永耳庵は「茶事三年」で「三溪園浄土飯茶事」として記している。供養の茶事をせずにはいられない三溪、そして客方の哀悼慰撫の情が痛いほど感じられ、源実朝筆の日課観音図(現・福岡市立美術館蔵か?)を金毛窟の床に掛けたと茶会記にある。

また、浄土飯について松永耳庵は次のように記している。・・・広間に一同着座してあれば、今し蓮華浄界より浮み来りしが如き碧瑠璃の荷葉(蓮)の華弁を敷き香飯を盛る。其見事さに一同嘆賞喝采、暫時箸もつけず見惚るる計りであった。お向うには大徳寺納豆一盞つけ、肅然いふばかりなき供養飯である。其香味歯牙を爽やかならしめ思はず数椀を傾けた。・・・

その暮れに高橋素庵が亡くなる。益田鈍翁は、その惜別の茶会を小田原でやる。原三溪も茶箱に名品を持って強羅の白雲洞へ行く。茶を楽しんだ近代数寄者の豊かな詩情がある。



(講演後昼食交流会。観世流名誉師範玉野宮夫師 能管・鼓・謡の披露と高山出身表千家五葉会長 古田宗絢社中呈茶)

8. 財界の茶も昭和15年をもって終焉を迎えた。そして大衆のものに、家元の時代へ。

明治29年から大師会が始まり、茶の湯の主人公が財界や政界の重鎮へと交代したが、12年に高橋箒庵が、13年に益田鈍翁が、14年に原三溪が亡くなった。最後の饗宴と言えようか。その意味においても、三溪園は数寄者の文化的遺産といえよう。

昭和15年に税制が変わる。1940年(昭和15年)改正 法人税法の制定によって従来の第1種が所得税から分離されて法人税となった。また、分類所得税と総合所得税の2本立てとなり、前者において所得種類別に異なった税率を適用するとともに勤労所得への源泉徴収制度が導入され、後者において所得合計が5,000円以上の者に10-65%の高度の累進課税をかけた。・・・そして、美術品はアンダーグラウンドに。

昭和15年に利休さんの350年忌は大変盛大に行われ、京都に3000人の茶人が集った。NHKで実況放送をやるくらいであった。これ以降、新しい茶の担い手は大衆のものとなった。わずかに松永耳庵(電力の鬼、中電)、小林一二三(阪急社主)らがいたが、今、茶の湯は大きく変わりつつある。大寄せの茶会が始まりであるが、実はこれはごく新しいものである。男性がいるのはマレである。

そして現代、茶も情報化の時代を迎えたといえよう。・・・(終わり)